

平成 26 年 2 月 26 日

日本学術振興会博士課程教育リーディングプログラム
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」
による派遣研究者研究報告書

所属部局・職 京都大学野生動物研究センター・博士課程学生
氏 名 中林 雅

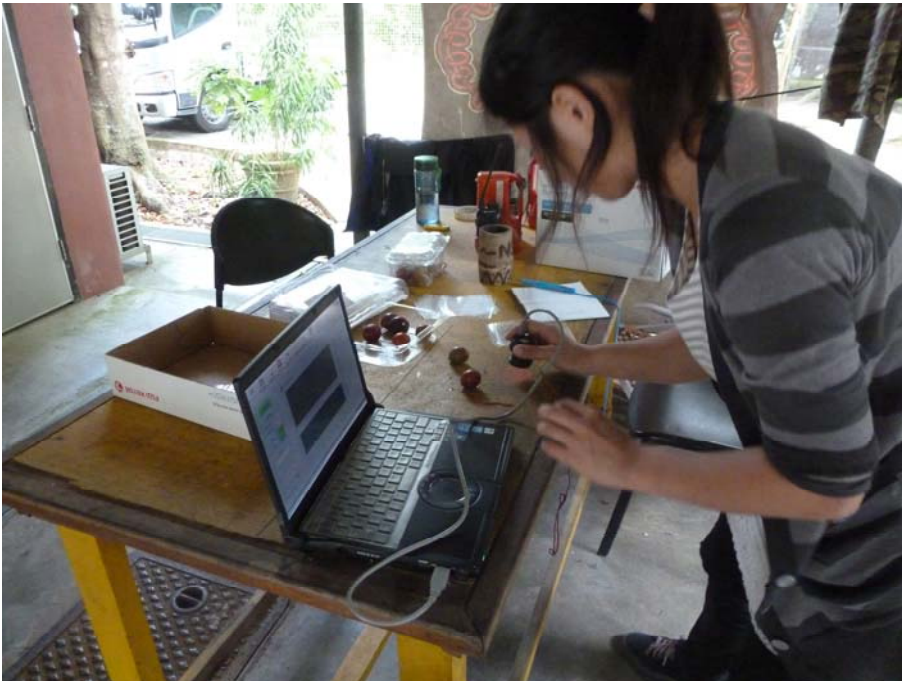
1. 派遣国名 マレーシア・サバ州ダナンバレー自然保護区及びシンガポール動物園
2. 研究課題名 果実食性食肉目パームシベットの採食生態解明のためのマレーシアでの
フィールド調査とシンガポール動物園での実験
3. 派遣期間（本邦出発から帰国まで）
平成 26 年 1 月 24 日～ 平成 26 年 2 月 23 日 （31 日間）
4. 主な受入機関及び受入研究者
マレーシア・サバ大学熱帯生物学保全研究所 アブドゥル・ハミッド博士
シンガポール・シンガポール動物園 ジョン・シャ氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果）

今回の渡航では、博士後期課程の課題である、果実食性食肉目パームシベットの採食生態に関する研究を引き続き行った。今回の渡航では、フィールド調査では実証が困難であった、パームシベットの消化吸収能力に関する実験を、シンガポール動物園の飼育個体を用いて行った。この実験では、非破壊で測定物に含まれる化学物質量を推定することができる携帯型近赤外分光光度計を用いて、給餌前の餌に含まれる化学物質と、それらを食べた個体の糞に含まれる化学物質を比較し、どの物質がどのくらい吸収されたかを推定する。実際には、飼育個体に、熟度が異なるプルーンの果実を与えた。これから化学分析を行い、どのような物質がどのくらい吸収されたかを解明する予定である。同時に、熟度から異なる果実の中から、どの果実を優先的に選択し、その果実にはどのような化学的特徴があるのかも明らかにする予定である。今回の渡航で得られた結果から、食肉目に特徴的な形態

を有しながら、果実が基本的な食資源という、矛盾しているように思えるパームシベットの採食生態を、これまで研究が行われてこなかった生理面からのアプローチにより、明らかにすることができるだろう。

フィールド調査では、テレメトリー発信機を装着した個体のうち、最大の果実食性パームシベットであるビントロングの個体追跡に成功し、採餌場所を数多く特定できた。現段階では、イチジクの結実木以外での採餌が確認されていない。また、ビントロングが採餌した結実木由来のイチジク果実の特徴を明らかにするため、それらの果実と、結実木周辺100m以内で結実している果実があれば採取し、各果実に含まれる化学成分を比較する予定である。

本研究の成果は、生態が明らかにされていないパームシベットに新たな知見をもたらすだろう。また、個体レベル、種レベルでパームシベットが優先的に選択する果実の特徴を明らかにできれば、パームシベットの保全に対し、具体的な方針を考える上で重要となるだろう。よって、本研究は、非常に斬新かつ重要な結果をもたらすと考えられる。



図：携帯型近赤外分光光度計で、プルーン果実の測定をする報告者

6. その他（特記事項など）

特になし